

空知【長沼町】

いながき まき
稲垣 真紀さん 認定NPO法人HOKKAIDOしっぽの会 代表理事

1959年生まれ、札幌市出身。ブリーダーになろうと犬を飼ったが、動物を売ることに疑問を持っていた。捨てられる犬猫の現状に触れて保護活動を思い立ち、長沼町の現地を購入。2002年に活動開始、2010年にNPO法人、2013年に認定NPO法人となる。



動物の幸せを願って、小さな命を救いたい

きっかけ

子どもの頃から動物が好きで、夢はたくさんの動物に囲まれて牧場に住むことでした。結婚後、犬を飼うために北広島市に一戸建てを購入し、ハスキー犬を飼ってブリーダーを始めたのですが、動物を売ることにに対して疑問を感じていました。3人の息子を育てながらパート勤務等をしており、南幌町に移り住んだ時にハイジ牧場(長沼町)で働き始めました。そこで、動物を勝手に捨てていく人がすごく多いことを知りました。この現状を変えたいと思って、離婚と同時に長沼町に土地を購入して、保護活動を開始しました。殺処分される直前の犬猫を全道から受け入れ、施設で一時保護して病気等のケアを行い、ホームページ等で紹介して新しい飼い主さんへお渡ししています。

苦勞

これまで会社で雇われて働いていたので、「代表」という形でメンバーをまとめることが苦手でした。最初は、代表といっても関係ないよ、みんな同じ仲間だからと言ってやっていたのですが、それじゃあ組織ってうまくいかないですね。ボランティアの方から会への不満が出てきた時に、自分が代表としてきちんと仕切らないといけないと考え、覚悟を決めました。それからは「代表」という意識を持ってやっています。すべては動物を守るためです。難しいのは人間の方で、動物のことで苦勞したことはありません(笑)。

満足度

動物を救いたい、幸せになってほしいという思いでやっているのでも、保護した時には弱ってボロボロだった犬猫が、新しい飼い主さんにもまれて幸せに暮らしていることを知ると、とても嬉しいです。お渡ししてから、3週間後と3か月後にご報告をいただくことにしているのですが、それ以外でも随時ご報告をいただき、みんな幸せそうな姿を見ると、本当に良かったと思います。捨てるのも人間ですが、助けるのも人間です。人が幸せでないと、動物も幸せになれません。動物も人間も、両方が幸せになってほしいと願っています。

これから

動物の殺処分数は減っていますが、動物が捨てられるという現状は続いています。まずは、飼い主がしっかり意識を持って最後まで飼うこと、必要以上に増やさないことを徹底したいです。私たちは、行政と協力しながら、動物を命として扱わない悪質なペットショップやブリーダーを摘発していきたいです。一般の方にも現状を考えてもらうため、パネル展等の啓発活動も行っています。あと、高齢でペットを飼いたくても飼えないという方のために、飼えなくなった時にお預かりできるような、サポートする活動をやってみたいですね。

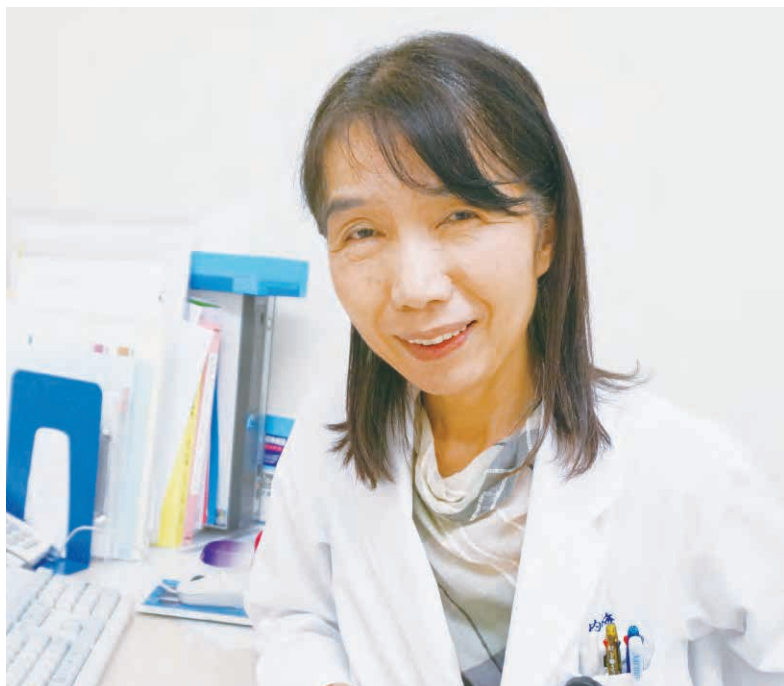
北の★女性たちへの
メッセージ

日本人の気質として、どこか人任せで、見たくないものは見ないようにするところがあると思います。でも、自分から動いてみて！動いてみると、状況が変わってきますよ。自分でやってみようよ！

空知【砂川市】

うつみ くみこ
内海 久美子さん 砂川市立病院 認知症疾患医療センター長

1955年生まれ、旭川市出身。北大教育学部卒業後、児童精神医学を学ぶため札幌医科大学に入学し、卒業後同大附属病院精神科に就職。そこでアルツハイマーの研究に触れたことを機に、認知症の研究を続け博士号を取得。1996年から砂川市立病院に勤務し、2010年から現職。砂川市内で夫、ペットと共に暮らす。



地域で認知症を支える「砂川モデル」を全国へ

きっかけ

当院で2004年に「もの忘れ専門外来」を開設したことをきっかけに、医療だけで認知症の方を支えることは難しいと感じるようになりました。認知症の方の生活全体を支えるには、まず地域の介護スタッフの協力が必要であると考え、「中空知・地域で認知症を支える会」（現在はNPO法人）を立ち上げました。認知症の方を多くの目で見守り、早期に必要な治療や介護サービスにつなげるため、介護・保健・福祉の各分野の方々と連携するとともに、市民や地域の介護スタッフ向けの啓発講演会や研修会、ご家族への支援等を行っています。また、当院での認知症の診察は、脳神経外科、神経内科、精神科が連携して実施しています。

苦労

苦労は、あまりありませんでした。地域の介護スタッフの方々は、認知症の正しい知識があまりない中で対応を求められ、困惑していたところに私たちが「一緒にやりましょう」と声をかけたので、抵抗なく受け入れてくれました。強いて言うなら、医師同士の連携が難しかったですね。他院の医師に「もの忘れ外来の相談医になってください」と依頼しても、なかなか了解を得られませんでした。患者さんがもの忘れ外来を受診する時は、かかりつけ医の紹介状が必要なのですが、書いてくれない医師もいました。そのような時は、私の方から手紙を書いて協力を依頼し、今では55の医療機関に相談医がいます。

満足度

地域での活動を通じて、住民の方、家族会の方、ボランティアの方、介護スタッフの方など多くの方々との出会い、思いを共有できる仲間ができました。医者って、病院の中にいると案外孤独なんです。患者さんやご家族から「助かりました、ありがとう」と言っていただけると励みになり、この喜びを仲間と共有できることが嬉しいですね。みんなががんばっているから、自分もがんばろうと思います。様々な職種の関係者が参加する「多職種事例検討会」を2か月に1回開催していますが、毎回参加希望者が多く、地域の熱気を感じます。顔を合わせることで関係者同士が繋がり、連携したケアができていていると思います。

これから

認知症の方を地域で支える上で、特に重要な役割を果たしているのは、ボランティア団体の「ぼっけ」です。病院や行政では手の行き届かない部分の、患者さん一人一人に合わせたきめ細やかなケアが「ぼっけ」では可能です。このようなボランティア活動を含めた「砂川モデル」が、全国に広がってほしいです。これからやってみたいことは、子どもと高齢者がふれあう多世代交流の場づくりですね。認知症の方や家族が集まる「認知症カフェ」を常設にして、子どもや地域の方々も気軽に交流できるようにできればいいなと思っています。

北の★女性たちへの
メッセージ

私のモットーは「何もやらないより、ダメでもともと、ダメモトでやってみよう！」です。失敗しても、必ず得るものはあります。「立ち止まるより、歩きながら考えよう」、そんなふうにして、やってみませんか？

空知【滝川市】

しばた なおみ
柴田 直美さん ピンクリボン・ディスカバ 代表

1968年生まれ、新十津川町出身。高校卒業後に空知管内で就職し、結婚後に雨竜町を経て滝川市に在住。今は夫、次男（高校生）と暮らす。2007年に自己触診で乳がんを発見。手術後の2008年に、同じ乳がん患者や友人らと市民団体「ピンクリボン・ディスカバ」を設立。現在、会員は滝川市外の方も増えて約30名。



「がんは怖くない、早期発見を」経験を元に検診を啓発

きっかけ

私が自分の乳がんを早期発見できたのは、乳がん経験者の知人から「自分で触ったらわかるよ」と教えてもらい、入浴時に毎日触診していたからです。乳房にコリッとしたしこりがあったのですが、手を離したらわからなくなって、翌日も触ってみただけわからなくて、翌々日に触ってみたらまたしこりがあった、私すごく健康だったので、これはきっと悪い物だと直感しました。それで、乳がんのことを色々調べて「10年生存率」というのが出ていて、この先の10年で自分にできることは何かと考えた時、やっぱり人の役に立ちたいと思って、病院に行く前から団体設立の構想を練っていました（笑）。そして、手術の半年後に、私の1年前に乳がんの経験をした友人と一緒に、団体を立ち上げました。

苦勞

前向きな性格なので、あまり苦勞と感じたことはなくて（笑）。手術の傷も勲章だと思っていますから、手術後すぐに温泉にも行きました。でも、相談者の方から「傷跡が恥ずかしくて温泉に行けない」という話を聞き、これは何とかしたいと思って、傷を隠す入浴着を製作している会社（東京都）の社長に会いに行ってサンプルをもらい、空知管内の温泉施設に配置してもらうことができました。その後、道議会議員の方などの協力もあり、全道の温泉施設に配置してもらいました。温泉施設側からは、「外国人観光客がタオルを湯船に入れたり、水着で入る人がいたりして対応に困る場合がある」という話を聞くこともありますが、傷跡が気になる方はぜひ入浴着を使って、温泉を楽しんでほしいと思います。

満足度

活動の中で、空知管内で開催される各種イベントの会場にブースを設置してもらい、がんの早期発見と治療の啓発を行っています。そこで「検診に行ってきたよ」と声をかけてもらえることが、一番嬉しいです。また、講演の講師をする時には、がんになったからこそわかることってありますよね、という「キャンサーズギフト（がんからの贈り物）」の話をさせていただくのですが、そこで「気持ちが軽くなった」と言ってもらえることも励みになります。普通の主婦だった私がこんなふうに活動できるのは、がんになったからです。どんなことにも感謝して、周囲の皆さんに助けをもらいながら、楽しんでやっています。

これから

砂川市立病院と深川市立病院で、がんサロンのピアサポーター（同じような立場の仲間への支援）をしています。そこで感じるのは、がん治療の地域格差です。札幌市周辺だけでなく、どの地域でも的確な治療を受けられ、安心して暮らせるようにしていきたいです。あと、「がん教育」を推進したいです。病氣と闘いながら懸命に生きている患者さんの姿を、子どもたちにも見てもらいたい。子どもの時からがんの正しい知識を学べば、将来検診にも行くでしょうし、自分や家族ががんになった時に落ち着いて対応できると思います。今、空知管内ではがん教育を始めている市町村もあるので、これから増やしていきたいですね。

北の★女性たちへの メッセージ

がんは、2人に1人は発病すると言われています。自分や家族が発病したとき、正しい知識があれば怖くありません。病氣が終わりではなく、そこから色々なことに気づくことができ、一歩踏み出す勇氣が出て、充実した日々を送れるようになります。早期発見のために、まず検診を！

空知【南幌町】

南幌町第15区女性防火クラブ

南空知消防組合において、各市町村単位で婦人防火クラブを立ち上げる動きがあり、南幌町においても協議を進め、1992年3月に「南幌町第15区婦人防火クラブ(2002年に現名称に変更)」を設立。現在の会員は約150名。



結成から24年、地域で助け合って防災を啓発し続ける

きっかけ

南空知消防組合では、「自分たちの地域は自分たちで守る」という精神のもと、住民や事業所などによる自主防災組織を確立することが重要であるとの考えから、各市町村で婦人防火クラブを立ち上げる動きがありました。南幌町においては、婦人防火クラブを町全域のものとした場合、組織が大きくなりすぎ、婦人防火クラブに不可欠な「地域住民相互の連帯感」が薄れるとの判断から、地域的なものにする事となりました。そこで、古くから南幌町の中心部として栄え、商店や飲食店が多い、第15区町内会に設立する運びとなりました。

苦勞

役員を中心に活動しており、避難訓練、消火訓練、AED実習、他市町村での施設研修、火災予防PR活動などを行っていますが、役員のなり手がなかなか見つからないのが悩みですね。介護をされていたり、共働きの家庭には負担をかけるので、各家庭の事情を考えながら役員をお願いしています。火災予防PR活動では、昔は赤飯の炊き出しをしていましたが、赤飯の準備に2日間もかかって大変なので、現在はやっていません。盆踊りも、やはり準備が大変で、続けられなくてやめました。無理をしない活動内容にしています。

満足度

毎年、訓練や研修を継続することで、消火器やAEDの使い方を覚えることができました。1回ではなく、繰り返しやるのが大切です。参加者から「勉強になった」と言っていただくと、やって良かったと思います。火災予防PR活動で、近隣のりんご農家さんをお願いして、りんごが赤くなる前に「火の用心」のシールを貼って、りんごが熟すと文字が浮き上がる「防火りんご」を作ってもらい、秋に各家庭に配付しているのですが、高齢者のお宅に行くと、特に独居の方には大変喜ばれます。安否確認にもなっており、地域のお役に立てていると感じています。

これから

結成当初は215名いた会員が、現在は約150名となりました。高齢化も進んでいるので、会員にはなるべく負担をかけないように、できる範囲での活動を続けていきたいです。1992年3月の結成以来、第15区からの火災は1件もありません。役員としては、「第15区から火災は絶対に出せない」という意識を高く持っています。近年、日本中で自然災害が多発する中で、防災の意識は高まっていると思います。南空知消防組合南幌支署の方々には、日頃から大変お世話になっており、今後も署員の方々と連携しながら、活動を続けていきたいですね。

北の★女性たちへの
メッセージ

私たちが24年間も活動を続けてこられたのは、無理をしないで、みんなでできる範囲のことを助け合ってやってきたからです。あまりがんばりすぎず、周りの助けを借りながら、無理なくやっていきませんか。

空知【奈井江町】

ふじわら さとこ
藤原 聡子さん ママとベビーのコミュニティサロン メルシー 主宰

1978年、大阪府出身。園田学園女子短大(兵庫県)を卒業後、大阪府内での保育士や海外での保育園実習等を経て、結婚後に兵庫県へ。次男出産後にベビーマッサージ講師となり、サークル講師等として活動。三男出産後に夫の転勤で奈井江町に移住し、2014年11月に「メルシー」を開設。



藤原さんと三男のTくん



ベビーマッサージでママと赤ちゃん和家人みんなを笑顔に

きっかけ

初めてベビーマッサージを体験したのは、長男を出産した産院で、すごく楽しくて赤ちゃんも私も笑顔になりました。長男と次男を出産した時、夫は海外勤務で、私は実家から離れた兵庫県で一人で育児をしていたのですが、その時に色々助けてくれたのがママ友でした。その後、私も子育て期の横の繋がりを支援したいと思っていた時、ベビーマッサージが資格制だと知り、すぐに講師資格を取得し、活動を開始しました。2014年8月に奈井江町に移住し、少し落ち着いてからサロンを開設しようと思っていたのですが、ブログを見てくれた近隣市町村の方から「冬は赤ちゃんとお出かけできる所が少ないので、早く始めてほしい」とメッセージを受け、2014年11月に開設しました。

苦労

奈井江町でサロンを開講する時に、一番悩んだのは価格設定です。果たしてベビーマッサージにお金を出して来ていただけるのか、価格を下げることも考えました。本州の先輩方に相談したところ、「良いものにはきちんとお金を払ってもらわなければならないので、価格は下げないこと」とアドバイスを受けて、価格は変更しませんでした。ママたちが来てくれるか不安でしたが、今はたくさんの方に来ていただいているので、良かったと思っています。

満足度

ママたちが、ベビーマッサージやサロンでおしゃべりすることで笑顔になって、少しでも育児を楽しんでいると感じてもらいたいという思いでやっています。ママのためにと考えていましたが、「夫婦の仲が良くなりました」というお話をお聞きした時は、ママだけでなくご家族全体が笑顔になっていただけたことを知り、とても嬉しかったですね。サロンに来てくださる方は、本当に良い方たちばかりで、初めて来た方にも優しくしていただき、すぐに打ち解けてみんな仲良くなっています。地域のママたちにとって、良い交流の場になっています。

これから

2016年7月から、主に札幌市内でのセミナープロデュースの活動を開始しました。ママたちの悩みごとや関心のあることを取り上げて、セミナーや勉強会を開催して、悩みや疑問を解決していきたいと考えています。北海道に移住して感じることは、北海道には素晴らしいものがたくさんあるのに、活かしてきていない！ということです。セミナーを通じて、「北海道ブランドを活かしてもっとこうしたら良い」という提案もしていきたいし、本州の情報を北海道でも提供できるようなパイプづくりをしていきたいですね。

北の★女性たちへの
メッセージ

北海道には、皆さんが気付いていない魅力がたくさん詰まっています。道外から来た私としては、まだまだおとなしい方が多いように感じます。積極的に交流して、一緒に北海道を盛り上げていきましょう！

石狩【新篠津村】

おおつか さなえ
大塚 早苗さん

有限会社大塚ファーム 取締役副社長、北海道指導農業者

1970年生まれ、札幌市出身。高卒後、自動車販売店のショールームアシスタント等を経て、2001年に農家の夫と結婚し新篠津村に移住。有機栽培で22品目の野菜等を栽培し、加工品やインターネット販売、営業を担当している。



100年続く農業の歴史を絶やさず次世代へ

きっかけ

結婚してすぐに3人の子どもが生まれ、私は子育てに専念していたのですが、その頃私が気になっていたのは、規格外野菜の廃棄が大変多いことと、夏場の農作業の季節雇用者が継続せず2～3年で辞めてしまうことです。夫は農作業や役員業務が忙しく、全然家に帰ってこない！そこで、規格外野菜を使ってプリンを製造しましたが、賞味期限が短くすぐに廃棄になってしまいます。これを軌道に乗せようと、販売の経験がある私が夫に代わって商談会等に売り込みに行き、この頃から私が加工品や営業を担当するようになりました。

苦勞

加工品を確立させるために、数年間かかりました。現在人気商品の「有機ほしいも」ですが、最初は自宅用に作付けしたさつまいもで子どものおやつに作っていたものを商品化したので、大量生産すると固すぎたり甘みがなかったりして、味が安定するまで苦勞しました。干し方が足りなくて芋が傷んでしまい、20箱くらい捨てたこともあります。人気商品になってからは、電話での問い合わせに対応しきれず2014年からインターネット販売を実施していますが、子育ての合間で深夜にパソコン作業をするなど、時間のやりくりが大変でした。

満足度

うちは生産者の顔や取り組みの見える農業をしているので、お客様から「おいしかった」と直接喜びの声をいただくと、大変嬉しく励みになります。大塚家は約100年前から続く農家で、夫で4代目。都市部で育った私が、先祖代々の土地で同じ農業を営むという大きな歴史の流れの一員になれたことに、喜びを感じています。そして、加工品を始めたことで、社員を通年で雇用し生活を支えられること、移住者を増やして村の人口減少対策になっていること等、社会貢献できていることも嬉しいです。私の活動を理解してくれる夫の両親にも本当に感謝しています。

これから

加工品の種類とハウスを増やして、これからの10年で売り上げを2倍にしたいです！そして、生産、加工、販売をそれぞれ独立させて、将来は3人の息子たちに経営を引き継ぎたいです。農業のセンスって、農家の子どもが一番持っていると思うんです。それを絶やさないために、私たちが持っている土地、施設、ノウハウを息子たちに継承したいです。子どもたちに経営を引き継いだ後は、営業の商談会や新しい取り組みをしている農家、企業等を巡って、自由に旅行したいですね(笑)。

北の★女性たちへの
メッセージ

農業は、すごく多様性のある仕事です。農作業をやる人、加工品を作る人、直売をやる人、会社での仕事を続けている人など、今のあなたのままで大丈夫、誰にでもできます。ネガティブなイメージもありますが、興味があればぜひ農業体験に来てください！

石狩【江別市】

ながのま
永野間 かわりさん 産後セルフケアインストラクター

1978年生まれ、岩手県出身。釧路教育大卒業後、地元に戻り幼稚園教諭に従事し、結婚を機に遠軽町へ。長男出産後マドレボニータを知り、網走市移住後に養成コースを受講。道東を中心に産後ケア事業を開始し、2016年に江別市移住後は札幌市内でも事業を展開。男児3人の母。



ママが主役の産後ケアで体力回復、気持ちも明るく！

きっかけ

遠軽町で長男を出産後、産後の体調不良と夫婦のコミュニケーションに悩み、なんとかしたいと情報を求めて偶然見つけたのが、マドレボニータの産後ケアでした。その後、産後ケアを受講するために講師を招き、網走市で体験講座を企画しました。バランスボールを使った有酸素運動と、「私は」を主語に大人の話をするワークで、心身ともにスッキリしたのを覚えています。また、運動と大人の会話で〇〇ちゃんママと呼んでいた母仲間たちの素の表情と魅力を知り、「今度は自分が産後ケアを広めよう」と、オンラインと東京都での養成コースに通い、産後ケア事業を開始しました。

苦勞

網走市で産後ケア活動を始めた時、参加者募集に苦戦しました。育休中や専業主婦の産後女性が、自分のためにお金を使うことをためらうことや、「受講料をもっと安くしては？」という声もありました。その度に、「私は産後ケアを『ママのリフレッシュ』ではなく、『出産したすべての女性に必要なもの』と認知・普及させていきたい」「自治体の母子保健・子育て支援に提案し、誰もが産後ケアに取り組める『新しい仕組み』をつくらう」と目標を持って続けました。産後ケア卒業生がご自身の住む町に産後ケアをリクエストくださり、自治体職員の方のご理解もあって、オホーツク管内の様々な自治体の母子保健・子育て支援・社会教育事業講座の講師を務めるようになりました。

満足度

私が提案する産後ケアは、産後1か月後までの養生中心の「受けるケア」の次の段階の、「自ら取り組むケア」。参加者が、「運動して体がほぐれて楽になり、気持ちも軽くなった」「自分を主語にした本音の対話で仲間もできた！」と喜んでくださることが一番の励みです。また、卒業生の口コミによって、産後ケアがリレーのように次の母へとつながっています。当事者の産後女性たちの支持と、人との出会い・つながりに支えられて働くことに、やりがいを感じています。道央に移住したことで、道東に加え、来年度は道央の自治体でも産後ケア講座の講師を担当する予定です。

これから

企業・法人に向けて、育休中の社員への復職支援の一つとしての産後ケアを提案していきたいです。仕事と育児の両立を諦めての離職予防に、育休中に適切な産後ケアで準備・復職する。そうすれば、「母になった女性」がより自分らしく、社会で自分の力を発揮することができるのではないかと考えています。また引き続き、自治体や産院にも産後ケアを提案していきます。自分一人で行えることは限られていますが、様々な分野の方々とながらタッグを組めば、心身ともに不安定な「子育ての導入期」をもっとサポートできる。そう期待して、これからも産後ケア普及に取り組めます。

北の★女性たちへの
メッセージ

「夫が」「子どもが」と誰かのせいにながら「妻・母の役割」を生きるのではなく、「私は」を主語に考え、話し、選択し、行動するおもしろい母が増えれば、北海道の子育てはもっとゆたかなものになります。その母の姿勢が、子どもにとって一番の生き方のお手本になる！そう私は信じています。

石狩【当別町】

ひやま ゆみ
檜山 由美さん 書家、農家

1966年生まれ、札幌市出身。高校卒業後、札幌市内で事務職として働き、米農家の夫との結婚を機に2004年から当別町在住。子育てをしながらインテリア装書等を学び、2015年10月から書家「由芽」として活動開始。2合サイズの米袋にメッセージを書いたものが贈答用として人気。



カラフルなオリジナルの書で、人の思いを応援したい

きっかけ

小学校3年生から高校2年生まで、習い事として書道をやっていました。当時は、書家になりたいと思うほどの情熱はなかったものの、書は好きでしたから、就職後も会社で機会があれば筆をとり、何らかの形で書に関わっていました。結婚後、札幌でインテリア装書の教室に行き、そこで「書は自由でいいんだ」と感じました。色も好きだったので、パーソナルカラー診断の講習も受けて、色の勉強もしました。その後、何かやりたい、と自分の中でくすぶっていた時に、起業女性の支援団体「North-Woman (ノースウーマン)」の講座を受けて思いが爆発し、「書と色を合わせて、とにかくやってみよう！」と思い、書家として活動を開始しました。

苦勞

夫は米農家ですが、私も昨年からは農業を手伝っていて、農家と書家のどちらもやりたいと思っています。農業は基本的に家族経営で、うちは人を雇うほどの利益はないので、経済面が一番大変ですね。私の書も、まだ高額で売れるものではないので(笑)。でも、夫は書家としての活動をすごく応援してくれていますし、私も夫の自然栽培にかける思いを尊敬しているので、二人で経済面を工夫してやりくりしながら、農家と書家を両立していきたいですね。

満足度

書家の活動の一つとして、お客様のご要望に応じて米袋にメッセージを書いているのですが、私が書いたものを喜んでいただけることが嬉しいですね。今までのお客様は、直接お会いしてお話を伺い、「勇気を持ってほしい、幸せになってほしい」という思いを込めて書いており、その思いが伝わっていると感じています。これからも「人の思いを応援したい」という思いを込めて書いていきたいです。書家としては活動を始めたばかりなのですが、色々な方から声をかけていただいて、感謝の気持ちでいっぱいです。始めて良かったと、心から思います。

これから

書家としては、まだまだこれからなので、書の表現をもっと勉強していきたいですね。オリジナルの表現方法を、もっと深めていきたいと思っています。あとは、当別町をもっと盛り上げていきたいです。当別町には、素敵な女性がたくさんいて、もっと色々なことができていると思っています。彼女たちと一緒に、当別町をもっとメジャーに、世界にアピールしたいです！私の書も、海外の方向けに日本の文化として発信することができればいいな、と思っています。

北の★女性たちへの
メッセージ

やりたいと思ったら、いつでも始められます。やりたいことがあったら、やってみましょう！行動しましょう！一歩踏み出しちゃいましょう！やってみると、世界がすごく広がります。自分が楽しいことが一番です！

石狩【恵庭市】

みかみ りえ
三神 利恵さん ファミリーホーム運営

1972年生まれ、帯広市出身。同市内で大学を卒業後、帯広市内で就職。友人たちの育児の大変さを見て「子どもに深く関わることがしたい」と思い、実家がある恵庭市内で2008年から里親となる。現在は、ファミリーホームの養育里親として5人の子どもを育てている。



子どもの成長を優しく見守り包み込む「お母ちゃん」

きっかけ

札幌市内で働いていた時、「子どもに深く関わる社会貢献的なことがしたい」と思い、実家がある恵庭市に移住し2008年に里親登録をしました。ここで、母親一人で仕事と育児を両立することの大変さを痛感し、シングルマザーをサポートしたいと考え、2013年に会社を設立しシングルマザー専用のシェアハウスを開設しました。しかし、そこに来る母親たちも幼少期に複雑な家庭環境で育っていることを知り、「まずは子どもをしっかり育てていきたい」と思い、2014年からはファミリーホームとして小学校3年生から1歳までの5人の子どもを育てています。

苦勞

子どもには何の罪もないのに、子どもたちは「親が育てられない」という状況を受け止めようと懸命にがんばっています。うちの子供たちは、実親との関わりもあり、気持ちが不安定になったり不満や疑問が出てくることもあるので、そこはしっかり受け止めてあげたいと思っています。ファミリーホームの定義は、「施設ではなく家庭の中で育てる」というものですが、補助者など家族以外の職員が出入りすることで「家庭」ではなくなってしまう恐れがあるので、「普通の家庭環境」を作っていくように工夫しています。

満足度

子どもたちが元気に成長してくれることが一番の喜びです。この気持ちは、一般家庭の母親と変わりないと思いますね。5人の子育ては、毎日バタバタして忙しいですが、「お母ちゃん大好き、甘えっこしたいの」と言って抱っこをせがまれると、子どもたち一人一人に向き合う時間をもっと作ってあげたいと思います。みんなで旅行に行って帰ってきた時に、子どもたちが「やっぱり家が一番落ち着く」「家のご飯が一番おいしいね」と言ってくると、「自分の家」と思ってくれていると感じて嬉しいです。

これから

小学校で絵本の読み聞かせボランティアをやっており、高学年の子どもたちには里親にも当てはまる内容が描かれている「ふたりのおかあさんからあなたへのおくりもの」という絵本を読んで、「里親は特別なことではなく、色々な家族の形があるんだよ」と伝えていきます。里親を社会の中になじませていきたい、そして里親をもっと増やしていくために大人に向けても発信していきたいですね。今、不妊治療の末に里親を選ぶ方も多く、若い里親が増えています。里親を、もっと柔軟に受け入れてくれる環境を作っていきたいです。

北の★女性たちへの
メッセージ

何かやりたいことがあったら、反対があってもやってみてください。反対以上に応援や励ましがあります。周囲の意見も大事ですが、自分の信じた道を進むことも大事です。もし諦めてしまったら、革新的なアイデアにふたをしてしまうかもしれませんよ。



石狩【札幌市】

第一交通産業グループ北海道ブロック

グループ総合社は福岡県北九州市にあり、2000年に北海道地区へ進出。ママサポートタクシー、子どもサポートタクシーなど女性のニーズに対応した事業を行うとともに、女性乗務員の新規就労・定着に積極的に取り組み、2016年国土交通省の「女性ドライバー応援企業」に認定。



利用者にも乗務員にも、ニーズに合わせて女性を応援

きっかけ

多様なニーズに対応していく中で、妊娠・子育て中のお母さんを応援する「ママサポートタクシー」を実施しています。タクシーを利用した産院送迎には、利用者の「タクシーを汚して迷惑をかけるのでは」という遠慮等があるようですが、事前に登録いただくことで、陣痛時にはバスタオルや防水シートをご用意する等の対応をしており、2016年12月までの登録は約4,700件、利用は約2万回以上となっています。こういった取組もあり、お客様からは女性乗務員へのニーズも高く、女性が働きやすい職場を目指しています。

苦勞

安心して「ママサポートタクシー」をご利用いただくため、助産師による介助研修を実施し、登録をいただいたら間違いなく送迎するよう事前に家の位置や団地の入口を確認するなど、責任を持って対応します。研修では、妊婦体験等に照れがある職員もいましたが、必要なこととみんな真剣に受講しています。ただ、女性乗務員を指名されることも多く、現在2割程度しか女性乗務員がいないので、もっと増やしていかなければならないと思っています。業界のイメージからか、求人を出しても女性になかなか見てもらえないところがあります。

満足度

「ママサポートタクシー」では、医療機関との連携や研修をしっかりとっていたことで適切な対応が出来たことに満足感がありますし、お客様から「無事出産し、退院できました」との報告をいただいたり、お礼の手紙や電話をたくさんいただけるようになりました。また、自分の子どもが生まれるとき出産にあまり関わってこなかったベテラン乗務員も、出産の現場に立ち会いお客様と一緒に喜びを感じているようです。陣痛中の妊婦さんを産院にお連れした時、病室に移動させる時間がないという医師の判断によりタクシー内で出産したという事例もあります。

これから

女性乗務員の接客は、お客様からお礼のお手紙をいただく割合が高いですし、2016年からは、3歳以上のお子様を対象に塾や学校の送迎等にご利用いただく「子どもサポートタクシー」の取組も実施しており、女性乗務員のニーズは高くなっています。当社では、女性が活躍できる職場を目指し、固定給制、子育てに対応した勤務体系等を実施しています。これからも、女性乗務員が働きやすい職場環境になるよう配慮していきたいと考えています。お客様目線のきめ細やかな接客で、より多くの方にご満足いただけるよう努めてまいります。

北の★女性たちへの
メッセージ

当社では、男女問わずタクシー乗務員として活躍していただける職場を作っております。きめ細やかなサービスができる女性乗務員の方が、お客様に好まれる状況もあります。運転、接客にチャレンジしたい女性の方々に応援しサポートしますので、ぜひ一緒に働きましょう！



石狩【札幌市】

HTB 北海道テレビ放送株式会社

1968年に本放送開始。2009年から仕事と家庭を両立できる働きやすい職場づくりに取り組み、2012年に「くるみん」マークを取得。2016年に「女性の活躍応援自主宣言」「イクボス宣言」を実施、同年「北海道両立支援推進企業表彰」を受賞。



2017年3月までにすべての管理職がイクボス宣言をしました



「OTAGAISAMA」精神で自分らしく働き、地域を応援!

きっかけ

HTBは、夢見る力を応援する広場です。視聴者の半分以上は女性であり、女性の共感を得られなければ番組は成り立ちません。作る側にもこれまで以上に女性や生活者の視点を生かそうと、2015年から女性の活躍推進を本格化させました。社内の意識改革、制度改革に積極的に取り組み「女性のチカラが生きるHTB」を目指すトップが自ら強力にメッセージを発信し続けています。2016年4月に「ワークライフバランス・ダイバーシティ推進部」を新設。長時間労働改善をはじめ、多様な価値観を受容する環境を整えることで新たな創造を生む、ダイバーシティ経営を進めています。

苦勞

女性社員数が少なく、全体の2割程度です。20～30代では積極的に女性を採用し3割程度ですが、40代以上が圧倒的に少ないです。かつては、ライフイベントにより退職する女性も少なくなかったのですが、現在は制度整備が進み、仕事と家庭の両立は制度上可能です。課題は多様な生き方を応援し、制度を活用しやすい職場の雰囲気づくりと働き方改革です。働き方改革に戸惑いを見せる社員・管理職もいますが、制度導入の理念を根気よく伝え、「女性のチカラが生きるHTB」とともに社内外で発信し続けていきます。

満足度

取り組みを始めたばかりで、満足とは言えません。2016年は専門部署を新設し、北海道の「女性の活躍応援自主宣言」や、NPO法人ファザーリング・ジャパンの「イクボス宣言」を全国のテレビ局として初めて行うなど、意識改革に力を入れてきました。2017年は、制度をより充実させていきます。若い世代では、男性でも制度を活用し家事や育児への参加を希望する社員がいます。上司と一緒に育児休業の申請に来た男性社員が「自分に続く後輩が育児休業を取得しやすくなれば」と話すなど、部署として男性の育休を支援する雰囲気が少しずつ出てきていることを嬉しく思っています。

これから

この取り組みをいかに「自分ゴト」にするかが今後の課題です。支援し、支援されるチカラ「OTAGAISAMA」(お互い様)精神を鍛え、どんなライフイベントを迎えても自分らしい選択ができる企業風土をつくっていきます。また、次世代を担う子どもたちに「テレビは面白い」としてもらいたい。それには、私たち大人がテレビ局で活き活きと働く姿を見せることが重要です。地域メディアで働く私たちが、メディア人、家庭人、地域人として役割を果たすことで、生活者に寄り添う情報を発信し、地域から必要とされる企業であり続けたいと考えます。

北の★女性たちへの
メッセージ

あなたが壁にぶつかった時、その壁が強く堅い時、あなたのしなやかさが、きっと、チカラになります。私たちHTBも地域の一員として、支援し、支援される「OTAGAISAMA」のココロを鍛え、多様な価値観が活きる地域社会とそこで暮らすあなたを応援していきます!